

## 新卒教員の適応感と支援ニーズに関する一考察 －卒後1年目の追跡調査をもとに－

高橋 佳代<sup>1)</sup>，日高 和美<sup>1)</sup>，白石 忍<sup>1)</sup>

### Subjective adjustment of new teachers and their support needs －Follow-up survey in the first year after graduation－

Kayo TAKAHASHI<sup>1)</sup>，Kazumi HIDAKA<sup>1)</sup>，Shinobu SHIRAISHI<sup>1)</sup>

#### Abstract

Feeling of adjustment and difficulties faced by new teachers during their first year of teaching in schools were investigated and future possibilities for supporting them were examined. A questionnaire survey was conducted with new teachers (N = 40) who had completed a university teacher-training course and become teachers. The questionnaire inquired about work environment, feelings of difficulty at school, subjective adjustment, motivation, feeling of exhaustion, and support needs. Furthermore, their own goals and what they expect of the teacher-training course were inquired using a free description format. As a result, 23 valid responses were collected. The results indicated that new teachers had difficulties in “student guidance” and “guidance in school courses.” New teachers were well motivated and had feelings of high responsibility, but also felt many difficulties and a strong need for support. The importance of investigating feeling of difficulty experienced by new teachers in more detail and the need to develop support systems to facilitate continues learning after graduation is suggested.

**KEY WORDS :** new teachers after graduation, feeling of adjustment, support needs

#### Ⅰ 問題と目的

今日の学校教育においては、いじめ・不登校等生徒指導上への諸課題への対応、道徳教育、特別支援教育の充実、外国人児童生徒への対応、新たな学びに対応するICTの活用への要請をはじめ、現場の複雑かつ多様な課題に対応することが求められている。急激に変化する社会の中で、学校現場における教員の力量はますます問われていると言える。

平成24年8月28日中央教育審議会は、教員の資質能力向上特別部会において平成22年6月より審議を続け

ていた「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（文部科学省,2012）を答申した。この中の「現状と課題」において、社会の急激な変化に伴い高度化・複雑化する学校現場の諸課題に対応するために「新たな学びを支える教員の養成と学び続ける教員像の確立」の重要性が指摘され、「教育委員会と大学との連携・協働により、教職生活全体を通じて学び続ける教員を継続的に支援するための改革」が必要であると提言された。そして、「取り組むべき課題」として、教科や教職についての基礎・基本を踏まえた理論と実践の往還による教員養成の高度化

1) 九州共立大学経済学部

1) Kyushu Kyoritsu University

の必要性が指摘された。教員が大学卒業後も学びを継続する意欲を持ち続けることができる仕組みの構築が必要である。

さらに平成25年10月15日には、「大学院段階の教員養成の改革と充実等について（報告）」（文部科学省, 2013）において,『学び続ける教員』を支援するため,養成は大学, 採用・研修は教育委員会・学校というこれまでの役割分担から脱却し, 教育委員会・学校と大学との連携・協働により, 教員の養成・採用・研修の一体的な改革を行っていくことが極めて重要である。」と指摘している。教員は初任段階においても学級担任等初任者が負う責務が大きい職業であることを踏まえ, 学校現場と大学を結んだ能動的な学修を通じて基礎的な実践的指導力が育成されることが望まれている。

一方で, 学校の小規模化や教師の多忙化が進む中, 公立学校の教員年齢構成は50歳以上が約4割を占め（文部科学省, 2010）教員の大量退職に伴う大量採用傾向は進行している。つまり, 経験の浅い教員が大勢の新任教員を育成しながら学校の中心となっていかなければならないということである。今後, 教員養成を担う大学は, 今日の学校教育の課題に即した教員養成を進めることがより重要であり, さらにには新任教員の支援体制の構築を急ぐ必要がある。

ところで, 本学の教職課程では中学・高校の保健体育科, 中学社会科, 高校地歴公民科, 高校商業科, 高校情報科教員の普通免許の取得が可能であり, 毎年50名ほどの学生が学部卒業後すぐに教員生活をスタートさせている。全国的な動向と同様に, 初年度はそのほとんどが常勤もしくは非常勤の臨時講師としての勤務である。臨時講師としての勤務者には公式な研修制度はなく, 初任者研修等の教育委員会が行う研修を受けることはできない。そのため, 彼らの研修の機会が極めて限定的である。そのような現状を踏まえると, 教員養成を担う大学として, 在学中はもちろん卒業後も, 教職につく者としてとして着実な歩みを進めるため一人ひとりの状況に応じたにきめ細かい対応を継続していくことが重要であると考え。今後, 現場に出た卒業生を継続的に指導し, 教員としてのキャリアを積み上げていく支援を的確に行うためには, まず彼らが現場でどのような課題を発見し, どこに支援ニーズを抱えているのかを把握する必要があるだろう。そして, 実際に現場に出た卒業生から本学の教職課程での学びに対する意見や要望を聴取することにより, 今後の本学教職課程における指導教育のあり方を検討することにより本学の教職課程の充実化を図る姿勢も極め

て重要であると考え。

よって, 本研究では, 本学教職課程卒業後1年目の現職教員を対象に追跡調査を実施した。卒業生が学校現場でどのような所感を抱いているのか具体的に調査することにより, 彼らの現場での適応感と困難感および支援ニーズの所在を明らかにすることが本研究の目的である。以上により, 今後の卒業生支援の可能性および教職課程における指導教育の充実化を目指す。

## II 方法

### 1. 調査対象

平成23年度九州共立大学を卒業し, 卒後すぐに教職についた卒業生のうち, 連絡先が不明なものを除いた40名。

### 2. 調査方法

無記名自記式調査票に, 調査の目的と個人情報の保護を明記した調査依頼書, 返信用封筒を同封し, 本人宛に郵送, 後日郵送で回収した。

### 3. 調査時期

平成25年1月～平成25年2月

### 4. 調査内容

#### 1) 職場環境に関する項目

「学校種別」「立場」「クラス担任状況」「部活指導状況」について, それぞれ選択により回答を求めた。

#### 2) 現場での困難感および相談者に関する項目

「仕事上で対応に困ることはどのようなことですか。」および「仕事上で困ったことや迷うことがあった時には誰に相談しますか。」という質問に対し, それぞれ複数回答可とし選択を求めた。

#### 3) 適応感および支援ニーズに関する項目（責任感, 楽しさ, 憔悴感, 支援ニーズ）

「今の仕事に責任を感じますか。」「今の仕事にやりがいを感じますか。」「今の仕事を楽しいと感じますか。」「今の仕事をやめたいと思うことがありますか。」「仕事上のことを相談するところが欲しいですか。」という質問に対し, それぞれ「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5件法により回答を求めた。

#### 4) 自分自身の課題に関する項目

「現場に出て, もっと学んでおけばよかったと思う点はどのようなことですか。」という質問に対し, 自

由記述で回答を求めた。

### 5) 本学教職課程に求めることに関する項目

「本学の教職課程にどのような支援があればよいと思いますか。」という質問に対し、自由記述で回答を求めた。

## 5. 分析方法

データ分析はIBM社SPSS Ver.21を使用し行った。

## III 結果と考察

### 1. 回収状況

対象者40名、回答数24名、内有効回答数23名、回収率58%。回答数23名のうち11名は、卒業生が大学行事で来校した際にアンケートを回収した。

### 2. 卒業生の勤務状況

勤務校は、公立中学校が10名（44%）、公立高校が7名（30%）、私立高校が1名（4%）、その他が5名（22%）であった。その他の内訳は公立小学校が2名、特別支援学校、組合立高校、社会福祉施設がそれぞれ1名ずつであった。

立場は、教諭が2名（9%）、常勤講師11名（48%）、非常勤講師7名（30%）、補助教員3名（13%）であった。

担任状況は、担任をしている者が6名（26%）、副担任をしている者が8名（35%）残りの9名（39%）はクラス担任を持っていなかった。

部活指導状況は、体育部の顧問が13名（57%）、文化部の顧問が1名（4%）、部活動を指導していない者が5名（22%）、顧問ではないが外部コーチやボランティアとして自主的に指導している者が4名（17%）であった。回答者の立場と担任状況および部活指導状況をクロス集計表（Table1）に示す。

回答者23名中約半数が常勤講師、30%が非常勤講師としての勤務であり、両者を合わせ回答者の8割近くに上ることがわかる。さらに常勤講師をしている者11名中5名はクラス担任として学級経営を担っている。

彼らは教科の指導に加え、学級担任として不登校やいじめ、保護者の対応など生徒指導および進路指導に取り組む必要がある。初任者であれ、目の前の児童生徒および保護者に対し、担任として責任を持った対応をせねばならない。前述したが、講師としての勤務では学びの機会は極めて限定的である。以上のような状況を踏まえると、本学の教職課程においても、卒業後の勤務状況をより意識し、今日の学校現場の様々な課題に対応することができる実践力を持った学生の養成をより意識する必要がある。例えば、4年生の授業の中で次年度に学級担任を持つイメージを持たせた上で、最初の学級作りや一年を見通した学級への働きかけ、学級作りには有効なワークやゲームなどを体験しておく、卒業後の新任教員の助けになると考えられる。また、教育実習後も教科だけでなく学級活動や生徒指導場面を想定した模擬指導を積み重ねておくことも有効であると考えられる。

### 3. 現場での困難と相談相手

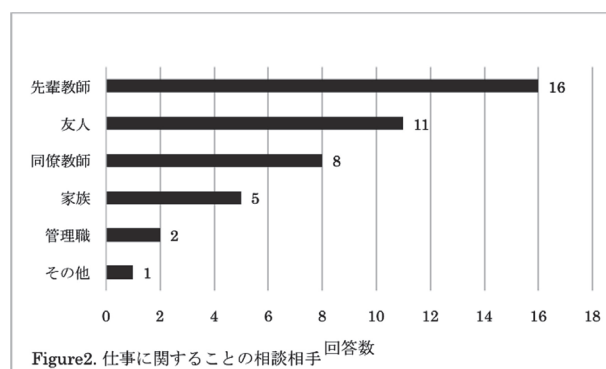
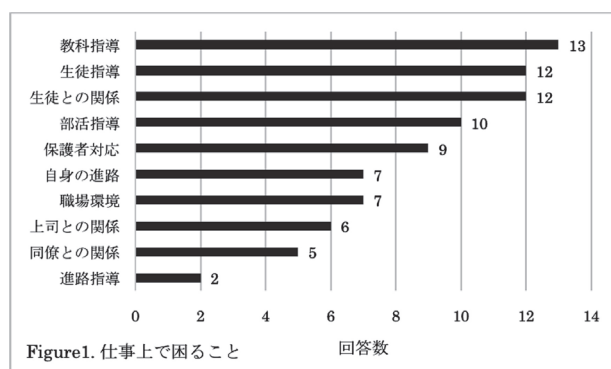
仕事上対応に困ることについての設問結果（複数回答可）をFigure1に示した。選択肢項10項目の選択割合は多い順から、「教科の指導」13名（16%）、「生徒指導」12名（15%）、「生徒との関係」12名（15%）、「部活の指導」10名（12%）、「保護者への対応」9名（11%）、「職場環境」7名（8%）、「自分自身の進路」7名（8%）、「上司との関係」6名（7%）、「同僚との関係」5名（6%）、「進路の指導」2名（2%）であった。

卒業1年目の教員が最も対応に苦慮している点は、教科指導そして生徒指導および生徒との関係であることが明らかになり約半数の回答者が「苦労している」と回答している。毎日の授業における指導案作り、授業展開、教材研究や授業の目的に合致した発問の仕方など教科指導に苦労している姿が伺われる。さらに生徒指導や生徒との関係、部活の指導のみならず保護者への対応など多様な生徒や保護者への対応など今日の学校現場の様々な課題に対応する難しさを感じているようである。また「自分自身の進路に悩んでいる」と

Table1. 立場と担任状況および部活指導状況のクロス集計表

		担任状況			部活指導状況				合計
		担任	副担任	担任なし	体育部	文化部	指導なし	その他	
立 場	教諭	1	1	0	2	0	0	0	2
	常勤講師	5	6	0	7	1	3	0	11
	非常勤講師	0	0	7	3	0	1	3	7
	その他	0	1	2	1	0	1	1	3
	計	6	8	9	13	1	5	4	23

※数字は人数。



回答した者も7名と多い。講師として身分が安定していない者も多い中、新卒教員が自分自身のキャリア形成に不安を抱えながらも日々の職務に取り組んでいることが明らかになった。

仕事上困った際の相談相手についての設問結果（複数回答可）Figure2に示した。選択肢6項目の選択割合は多い順から、「先輩教師」16名（37%）、「友人」11名（26%）、「同僚教師」8名（19%）、「家族」5名（12%）、「管理職」2名（5%）、「その他」として恩師を挙げた者が1名（2%）であった。

困難に際した時のサポート役として、「先輩教師」を挙げた者が最も多く、勤務校内での支援を得られていることが示された。一方で、半数弱の者が「友人」を挙げており、個人的な繋がりが彼らの支えになっていることも明らかになった。

#### 4. 現場での適応感と支援ニーズ

仕事への責任感、やりがい、楽しさ、憔悴感、支援ニーズに関するそれぞれの質問「今の仕事に責任を感じますか。」「今の仕事にやりがいを感じますか。」「今の仕事を楽しいと感じますか。」「今の仕事をやめたいと思うことがありますか。」「仕事上のことを相談する所が欲しいですか。」に対する回答人数をTable2に示す。

「仕事に責任を感じるか」という質問に対し回答者全員が「少しそう感じる」もしくは「とてもそう感じ

る」と回答している。また、「仕事にやりがいを感じるか」という質問に対しても1名を除き他全員が「少しそう感じる」もしくは「とてもそう感じる」と回答している。また、「仕事が楽しいか」という問いに対しても、「そう感じない」と回答した者はいない。すなわち、新卒教員のほぼ全員が教師という職務に責任感とやりがいを強く感じ、楽しいという実感を持つ事ができていることが明らかになった。

一方で、「やめたいと思った事はあるか」という質問に対しては10名（43%）が「少しそう思う」もしくは「とてもそう思う」と回答している。さらに、「相談する所が欲しいか」という質問に対しては12名（52%）が「少しそう思う」もしくは「とてもそう思う」と回答している。つまり、新卒教員の多くが教師という仕事にやりがいと責任を感じつつも、「やめたい」と思うことも多く支援ニーズも高い。今回の調査からは、「やめたい」と感じる場面やその内容が明らかになっていないが、彼らの感じる困難感の詳細を今後明らかにし支援に繋げることが重要であると考えられる。

#### 5. 自分自身の課題、学習の足りない点

「現場に出て、もっと学んでおけばよかったと思う点はどのようなことですか。」という質問に対する自由回答記述内容に対し、記述された内容からキーワードを読み取り、11項目に対応させて集計した。複数回答である。複数人が回答した内容は、回答数が多い

Table2. 現場での適応感および支援ニーズに関する項目への回答人数

	全く感じない	あまり感じない	どちらでもない	少し感じる	とても感じる
責任感	0	0	0	5(22%)	18(78%)
やりがい	0	1(4%)	0	7(31%)	15(65%)
楽しい	0	0	3(13%)	7(31%)	13(56%)
憔悴感(やめたい)	8(35%)	4(17%)	1(4%)	8(35%)	2(9%)
相談したい	1(4%)	7(31%)	3(13%)	5(22%)	7(31%)

※数字は人数。( )内は割合。

順から「専門的な教科指導方法および専門知識」が10名（34.5%）,「様々な生徒に対応できる生徒指導」が4名（13.8%）,「読書や遊び,雑学など幅広い体験」「採用試験対策」「ボランティア体験」が3名（10.3%）であった。集計結果をTable3に示す。

最も多かった回答は「専門的な教科指導方法および専門知識」に関する記述であり,「様々な生徒に対応できる生徒指導」に関する記述がそれに続いている。前述したが,多くの学生が教科指導および生徒指導に難しさを感じ,自身の力量不足を痛感していることが明らかになった。いじめや不登校,体罰等様々な教育現場での課題に取り組む中,発達障害や配慮が必要な生徒への対応等,専門知識ではカバーできない柔軟な対応を求められる事も多い。そのような中,多様化する子どもたち一人一人に対応できる教師になるために自身の生徒指導力不足を感じているのだろう。

さらに,「読書や遊び,雑学等幅広い体験」「ボランティア活動」「採用試験対策」を挙げた回答も10%程見られる。教育問題や教育時事に関する知識だけではなく,幅広い教養と様々な社会体験,社会貢献活動の経験など多様な社会との繋がりや人間関係形成の経験が生徒指導や学級経営に直結するという実感とスキルアップへの強い意志が読み取れる。講師として勤務する者は教員採用試験を突破していかねばならず,今後卒業生へどのような支援ができるのか検討する必要がある。

## 6. 本学教職課程に望む点

「本学の教職課程に望むことはどのようなことですか。」という質問に対する自由回答記述内容に対し,記述された内容からキーワードを読み取り,7項目に対応させて集計した。複数回答である。複数人が回答した内容は,回答数が多い順から「ボランティア等学

校現場での体験」が4名（33.3%）,「学生と卒業生との研究授業や交流の機会」「より多くの模擬授業体験」が2名（16.7%）である。集計結果をTable4に示す。

「ボランティアなど現場体験活動」という回答が最も多い。卒業前からの現場を知る体験は,多くの子どもたちとふれ合う中での現代の子どもたちのコミュニケーションの特徴を体験的に学ぶ機会,さらには自身のコミュニケーションスキルを向上させる機会になる。教職を目指す学生は,意欲的にボランティアなどの社会貢献活動に参加し自身の資質能力を高めることが必要であり,大学として多様な体験活動の機会を積極的に提供する必要があるだろう。また,大学の教職課程において模擬授業やロールプレイなどを取り入れたより実践的な授業の展開を要望する回答もある。教員を養成する大学として,学生の実践力を高めるための授業の充実化を図る努力をさらに続ける事が重要である。

また,同窓会組織の運営や卒業生と在学生の研究授業や交流会の開催を望む記述もある。このような機会は,在学生在が現場の雰囲気を知る機会にもなる上に,卒業生の支援としても有効であろう。在学生と卒業生双方が切磋琢磨し,教師として充実したキャリアを積みながら教師としての資質能力を向上させるような教職課程の充実,さらには卒業生への支援体制の構築が望まれる。

## IV. まとめと今後の課題

教職という職業は,当然免許取得がゴールではなく,その後の研鑽が求められ,教職生活を通じて学び続けることが必要な職業である。研鑽は通常,勤務校内外での様々な研修や個人的な繋がりの中で行われる。しかしまた一方で,教職に就いた後の研鑽においても,教員養成を担う大学としての役割があると考えられる。

Table3. 自身の課題、勉強不足と感じる点

項目	内容	回答数	割合(%)
1	専門的な教科指導方法および専門知識	10	34.5
2	様々な生徒に対応できる生徒指導	4	13.8
3	読書や遊びや雑学など幅広い体験	3	10.3
4	採用試験対策	3	10.3
5	ボランティア体験	3	10.3
6	発達障害に関する知識	1	3.4
7	部活動の指導に関する知識	1	3.4
8	特別活動、総合的な学習の時間の指導方法	1	3.4
9	基礎的なマナー	1	3.4
10	板書能力	1	3.4
11	保護者対応の方法	1	3.4
	計	29	100

本研究から、卒後1年目の新卒教員の多くが教職にやりがいと責任感を感じながらも、困難感も強く感じ、支援ニーズを抱えていることが明らかになった。力量不足を感じる点としては「教科指導」に関する専門的知識や技術に加え、様々な生徒に対応するための「生徒指導」に関する知識や技術を挙げた者が多かった。また、様々な幅広い体験をすることの重要性が指摘され、卒業前からボランティア等を通じた現場体験活動や社会貢献活動の重要性が確認された。今回の調査は小規模で回答数も少ないため、統計処理が行えなかったが、今後より大規模な調査を行う事で、担当科目や勤務状況、学級担任状況などにより彼らの困難感に差があるのか、さらにはどのような場面でどのような困難感を抱いているのか、より詳細な調査を行う必要がある。この点は今後の課題としたい。

また、本学教職課程に望むこととして、卒業生支援や在学生と卒業生の研究授業・交流会の開催、同窓会組織の運営等の要望が得られた。教員養成を担う大学として充実化をさらに図りながら、本学で免許を取得した学生の追跡調査、彼らが教職生活を通じて学び続けることができるよう卒後の支援体制の構築を進めていきたい。

Received date 2014年1月7日

## V. 引用文献

- 1) 文部科学省(2012).教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について.中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会答申,  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf) (2014年1月5日取得)
- 2) 文部科学省(2013). 大学院段階の教員養成の改革と充実等について(報告). 教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm) (2014年1月5日取得)
- 3) 文部科学省(2010).文部科学省調査教職員の年齢構成.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/05052301/s001/004.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/05052301/s001/004.pdf) (2014年1月5日取得)

Table4. 本学の教職課程で充実を望む点

項目	内容	回答数	割合(%)
1	ボランティアなど学校現場での体験	4	33.3
2	学生と卒業生との研究授業や交流機会	2	16.7
3	より多くの模擬授業	2	16.7
4	同窓会組織の運営	1	8.3
5	発達障害に関する詳細な授業	1	8.3
6	他教科専攻の学生との交流の機会	1	8.3
7	ロールプレイなど生徒指導実践授業	1	8.3
		12	100